

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



首都決戦を制す

「初の女性都知事」小池百合子氏の事務所には、多くの報道陣が集まった

＝7月31日夜、東京都豊島区

撮影：遠藤 啓生（朝日新聞社映像報道部）

「大使の存在感」アピール 英EU離脱問題で欧州各国大使

7月は欧州各国大使の仕事ぶりに感服した。

EU離脱を選択した英国の国民投票で、当事者性を持つゲストとして、英独仏EUの駐日4大使を次々に招待した。

最初に登場した英国大使は4カ月前に当クラブで「EU離脱は日本企業にも深刻な打撃を与える」と警告したばかり。今回は「心配しなくても大丈夫」と逆方向の説明を迫られたが、その複雑な役回りを時に笑顔を浮かべながら見事な日本語でこなした。

独仏両大使からは「二人で一緒に会見したい」との申し出があり共同会見となった。掛け合いのように息の合ったところを見せ、さらに「われわれの娘は共に英国で暮らしています。そして今日の会見は母国語でなく英語ですよ」と、独仏連携の強さと英国への配慮を洒脱にアピールした。

EU大使は、苦勞の末EU加盟を果たした小国ルーマニア出身。「平和で安定した欧州には、EU以外の選択肢はない」とニコリとめせず断言した。

政府見解の枠内で、それぞれの個性を生かして自国の事情を積極的に伝えようとするプロ意識と技を強く感じた。「オフレコでの外交裏話は面白いが、オンレコは公式見解の棒読み」という大使に対する先入観が気持ちよく裏切られた。

国際報道の現場に早く出たいというずうずうしい若手記者諸君。まずは地下鉄で内幸町まで「海外出張」に来てください。

（土生修一）

東京都知事選共同会見 3

クラブゲスト 4・5
 ティム・ヒッチンズ駐日英国大使／ヴィ
 オレル・イステイチャイア＝ブドウラ駐
 日EU大使／ハンス・カール・フォン・ヴ
 ェアテルン駐日独大使、ティエリー・ダ
 ナ駐日仏大使／梅原季哉・朝日新聞編成
 局長補佐、鶴原徹也・読売新聞編集委員
 ／黒川光博・虎屋社長／石川康晴・ス
 トライブインターナショナル社長／西田亮
 介・東京工業大准教授／松本正生・埼玉
 大教授／山城紀子・ジャーナリスト／我
 部政明・琉球大教授／核軍縮検証のため
 の国際パートナーシップ／アヴィ・
 ハッソン・イスラエル経済産業省チーフ・サ
 イエンティスト／田邊揮司良・東京都危
 機管理監／玉田芳史・京大大学院教授／
 アフメト・ビュレント・メリチ駐日トルコ
 大使／小和田恆・国際司法裁判所判事／
 クライド・プレストウィッツ米経済戦略
 研究所所長／茂木崇・東京工芸大専任講
 師／山下真理・国連平和構築支援事務所
 次長／開沼博・社会学者、竜田一人・漫
 画家、吉川彰浩・元東電社員

会見レポート
 シリーズ「BrexitとEUの未来」 6
 梅原季哉氏、鶴原徹也氏／研究会
 「参院選後の日本 民意を読む」 7
 駐日トルコ大使／茂木崇氏 8
 著者と語る「福島第一原発廃炉図鑑」 9

首都直下地震 研究会／見学会報告 10
 記者ゼミ R入門／会議報告 11

ワーキングプレス 12・13
 参院選 世論調査

共同通信社 池田健夫
 米大統領選 共和党全国大会
 毎日新聞社 國枝すみれ

被災地通信 福島県葛尾村 14
 避難指示解除 福島民報社 米谷量平

新・列島報告 鹿児島県知事選 15
 多難な船出の三反園県政
 南日本新聞社 木場志郎

書いた話書かなかった話 16・17
 アポロの月着陸 意外にも環境問
 題に火をつけた！ 柴田鉄治

マイBOOKマイPR／寄贈書 18
 リレーエッセー 19

私が会ったあの人
 免疫学者・能作家 多田富雄さん
 羽原清雅

都知事選立候補予定者共同会見に300人超 「チエンジ・メーカーズ」挑戦する経営者が続々登場

都政は「政治とカネ」をめぐる疑
 惑で外添要一都知事が辞職に追い込
 まれ、予定外の都知事選挙となった。
 主要政党による候補者選考が混乱し
 たこともあり、都知事選関連ニュー
 スは参院選を押しつけて連日、大き
 く報じられた。

都知事選、有力候補が一堂に

大ニュースに即応した緊急会見を
 設定するのは日本記者クラブの重要
 な任務。さっそく告示前日の7月13
 日に会場を押さえて準備を始めた。

ところが交渉相手が二転三転して
 はっきりしない。政治部系の企画委
 員各位の協力も得て、ようやく予定
 日前日になって宇都宮、小池、鳥越、

増田の有力候補予定者4氏全員の出
 席が確定した。

4人そろっての共同会見は初めて
 とあって、出席者は今年最多の30
 3人を記録、NHKと民放キー局は
 生中継で会見の一問一答を伝えた。

各党が入念な事前準備をする国政
 選挙と違い、今回は各候補予定者と
 も突然だったため、政策面では準備
 不足であいまいな部分も多かった
 が、その分、本音や素顔がのぞくア
 ドリブ的な発言が多く、緊張したラ
 イブ感のある会見となった。

例えば、小池氏が増田氏に向かっ
 て「どうして（自民推薦が）私じゃな
 かったとお考えになるのでしょうか」
 と聞き、増田氏が「小池先生のやら

れていることは少し劇場型のよう
 で、それが皆さんの判断になったの
 では……すみません」と恐縮しながら
 も、反撃する場面などは、その後何
 度もテレビで繰り返し報じられた。

また、鳥越氏がボードに書いた
 「がん検診100%」も公約として
 の是非をめぐり論議を呼んだ。当ク
 ラブウェブサイトの会見動画アクセ
 ス数も1万近くにのぼっている。

経営者の挑戦心と若者たちの不安

発生ニュースへの即応とは別に、
 当クラブでは「時代のうねり」を知
 るための長期企画も進行している。

そのひとつが今年2月から始まっ
 た、革新的な経営を進めている企業
 トップが自らの理念を語る「チエン
 ジ・メーカーズに聞く」シリーズだ。
 7月は、室町末期から続く和菓子
 の老舗「虎屋」の黒川光博社長と、斜

陽といわれるアパレル産業で4坪の
 店を年商1100億円まで急成長さ
 せたストライブインターナショナル
 社の石川康晴社長の2人が登壇し
 た。72歳の黒川社長は「100年か
 けても羊羹を世界的な菓子に」と熱
 く語り、45歳の石川社長は「これか
 らは1兆円企業をめざす」と目を輝
 かせた。

老壮2人のリスクを恐れない旺盛
 なチャレンジ精神に「日本はまだ大
 丈夫」と安心した翌週、今度は「日
 本はどうなるのか」と心配になる調
 査結果を埼玉大の松本正生教授の会
 見で知った。

参院選分析の関連で松本教授は、
 高校生、大学生を対象に「将来の不
 安」をたずねた毎日新聞の世論調査
 で、「老後の生活」(29%)が「結婚」
 を上回り3位となっていると紹介し
 た。NHKの同種の調査でも、「老
 後の生活」と「進学」が同率3位だっ
 た。ちなみに「老後」とは、親では
 なく学生自身の老後のことだ。

「成功した一部経営者と匿名多数
 の若者たちを比べても無意味」果敢
 な少数者と臆病な多数者が並存する
 のは世の常」と言われればそれまで
 だが、それにしても、その「精神の
 コントラスト」が気になった。

(専務理事 土生修一)



ステージ左から宇都宮健児、小池百合子、鳥越俊太郎、増田寛也の4氏。多数のカメラが向けられた冒頭の撮影タイム

東京都知事選共同会見

(7・13)

候補の資質あぶり出す工夫

の個性を引き出す工夫を心掛けたつもりだ。結論を言

東京都知事選の候補者による共同会見は、開催前日に主要候補がようやく出そろったという厳しい日程の中で実現した。2代続けて「政治とカネ」をめぐる不祥事で知事が辞任する異常事態。2人の資質を十分にあぶり出せなかった点でメディアも責任を免れないと考えている。

それだけに主要4候補が初めてそろい踏みする機会となった共同会見の重みをひしひしと感じながら臨んだ。

山積する都政の課題への見解とともに、候補者の



小池百合子氏の揮ごう

えば政策論議はかみ合わなかったと思う。説明能力に優れる各氏は自己アピールに終始した。ただ選挙戦のスタートとして、各氏の人柄、見識、戦略の一端を浮かび上がらせることはできたのではないか。

自民党を割って早々に出馬表明した小池百合子元防衛相は、自民、公明両党の推薦を受ける増田寛也元総務相に対して「増田さんはどうして（与党推薦が）私じゃなかったと考えるのか」と迫った。対立の構図を打ち出すことにより、「逆風の中で初の女性都知事をめざす」という戦略が鮮明になった。対する増田氏は「行政の現場で生きてきた人間」だと官僚、岩手県知事の経験のアピールした。東京一極集中による「地方消滅」を指摘してきた立場から、五輪に向けた東京の再開と地方の衰退に



う臨むのかを問い掛けた。告示直前に出馬表明したジャーナリストの鳥越俊太郎氏は「安倍政権は戦後最悪の内閣」と言い切った。公約に掲げた

率100%を高齡化という問題にどう絡めていくのか。政策の具体化が課題であることは明確になったと思う。弁護士の前都宮健児氏は会見後に出馬を辞退した。貧困・格差対策を掲げた宇都宮氏の支持者の動向が選挙戦の1つの焦点であり、主張を聞く意味はあったと考える。

共同会見は選挙戦の緒戦に過ぎない。候補者を見極めるため、さらに論戦を深める必要性を痛感した。

企画委員 共同通信社論説副委員長

川上 高志

実施要領メモ ▼日時：7月13日(水) 14:00～15:40 ▼会場：10階ホール ▼登壇者：宇都宮健児、小池百合子、鳥越俊太郎、増田寛也の立候補予定者(50音順) ▼司会：小栗泉企画委員、代表質問：川上高志、瀬口晴義の両企画委員 ▼進行：各候補者が立候補にあたっての基本的な主張を述べた後(持ち時間3分)、川上・瀬口の両委員が代表質問(約50分)、候補者同士による討論(約10分)。その後、都庁クラブ幹事社および会場からの質問 ▼都知事選の共同会見は2012年11月に続き2回目 ▼出席：303人 ▼会見詳録

いしかわ やすはる
石川 康晴 ストライプインターナショナル社長

中2で「洋服屋になる」と決意。23歳で4坪のセレクトショップを始め、業態を変える路線転換を重ねて急成長、今やグループ売り上げ1100億円の国際的アパレル企業に。「成功体験を捨ててこそ会社は成長できる」。次は「アジア1000店舗、売り上げ1兆円をめざす」。

■ 7・6(水) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑧／司会：安井孝之委員／出席：32人

にしだ りょうすけ
西田 亮介 東京工業大学准教授

気鋭の若手学者が参院選翌朝に登場。特番出演でほぼ不眠。「野党は憲法の争点化に失敗」「18～19歳の政治的記憶は2012年総選挙から。民進党への肯定的記憶なし」「三宅洋平候補の『選挙フェス』はポピュリズムと表裏だが、新しい政治手法になり得る」

■ 7・11(月) シリーズ企画「参院選後の日本 民意を読む」①／司会：川上高志委員／出席：46人

まつもと まさお
松本 正生 埼玉大学教授

18～19歳の投票率45.45%は「予想以上に高い」と評価。高校・大学生アンケートの「老後の生活が、結婚より不安」という驚きの結果を紹介、将来におびえ保守化する若者像を示した。若年層の政治意識向上のため、有権者登録制度の導入を検討課題として提案した。

■ 7・14(木) シリーズ企画「参院選後の日本 民意を読む」②／司会：島田敏男委員／出席：60人
7ページに西田・松本両氏をまとめた会見レポート

やましる のりこ
山城 紀子 ジャーナリスト

元沖縄タイムス記者。女性や医療福祉などが専門テーマ。6月の米軍属による女性殺害事件を受け「沖縄では性暴力は長らく沈黙の犯罪だった。1975年の国際婦人年をきっかけに意識が変化し、被害者が語り始めた。女性の視点からも米軍基地はいらない」。

■ 7・14(木) シリーズ企画「沖縄から考える」⑪／司会：川上高志委員／出席：32人

がへ まさあき
我部 政明 琉球大学教授

焦点の日米地位協定がテーマ。沖縄県の幅広い改定要求を説明した上で「外国軍隊と地域社会との接触を極小化する。米兵の外出を制限し騒音や水質・土壌汚染を基地内に閉じ込める」考え方を示した。「人々が納得しない今のやり方では基地は維持できない」

■ 7・21(木) シリーズ企画「沖縄から考える」⑫／司会：島田敏男委員／出席：61人

ティム・ヒッチンス 駐日イギリス大使



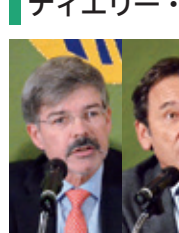
「英国はEUを離脱するが、欧州大陸に背を向けるわけではない。また対英投資で1～9位はEU以外の国」と離脱に伴う過度な不安を戒めた。国内政治については「英国政治の主戦場は中道であり、ここを制すれば勝利者になる」と指摘した。

■ 7・1(金) シリーズ企画「BrexitとEUの未来」①／司会：福本容子委員／通訳：池田薫／出席：109人

ヴィオレル・イステチョアイア=ブドゥラ
駐日EU大使

英国の離脱について「EUは民主主義ベース。残念だが結果を尊重する」。しかし「EUの一体感を過小評価してはならない。平和で豊かな欧州を築くにはEU以外の選択肢はない」と断言。「日欧EPA交渉に英国離脱の影響はなく、年内合意をめざす」とも。

■ 7・5(火) シリーズ企画「BrexitとEUの未来」②／司会：土生修一専務理事／通訳：友田真理／出席：53人

ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン
駐日ドイツ大使(左)

「EUは最初から危機続き。危機を乗り越えるごとに強くなってきた」(独大使)「英国民投票で加盟国民は離脱に伴う危険がわかった」(仏大使)。独仏連携でEU悲観論に反論した。

■ 7・6(水) シリーズ企画「BrexitとEUの未来」③／司会：福本容子委員／通訳：ベアーテ・フォン・デア・オステン、西村好美／出席：92人
6ページに上記4大使をまとめた会見レポート

うめはら としや
梅原 季哉 朝日新聞社編成局長補佐(左)
つるはら てつや
鶴原 徹也 読売新聞社編集委員

両氏とも欧州大陸と英国で特派員を経験。「離脱派は熱気があった。理屈ではなく情念の世界」(梅原氏)「超国家組織としての欧州統合はロマンチストの夢。EUは冷戦ゆえに実現した」(鶴原氏)

■ 7・7(木) シリーズ企画「BrexitとEUの未来」④／司会：土生修一専務理事／出席：59人
7ページに会見レポート

くろかわ みつひろ
黒川 光博 虎屋社長

室町時代後期創業の老舗和菓子屋17代目。「家訓がないので縛りがない。前向きに思い切りやりたい」。パリ支店もあり、「羊羹をチョコレートのような世界的菓子にしたい」と意欲満々。揮ごうは「大切なのは、今。伝統に安住しない挑戦心が伝わってきた」。

■ 7・5(火) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑦／司会：水野裕司委員／出席：45人

小和田 恒 国際司法裁判所 (ICJ) 判事



論理明晰。「世の中に知られていない」国際司法裁判所の役割を丁寧に話した。「国同士の争いは増え、環境、人権と付託される範囲も広がった。倍くらい忙しい」「日本人記者はまず来ない」と苦言も。あえてオンレコで話した熱意に応え記者はハーグを訪ねるべし。

■7・25(月) 記者会見／司会：中井良則顧問／出席：64人

クライド・プレストウィッツ 米経済戦略研究所所長



レーガン政権で日米貿易交渉を担当した知日派。近著『日本復活』では、経済復興、沖縄独立、米軍撤退、核武装化、エネルギー自立など日本の未来を壮大に描いた。「復活しようと思えばできる。そのためには為政者が危機感を持つことが必要」と説いた。

■7・26(火) 著者と語る『2050近未来シミュレーション 日本復活』／司会：会田弘継前企画委員長／通訳：池田薫／出席：57人

茂木 崇 東京工芸大学専任講師



監修したジャービス教授の著作を「議論のたたき台」と紹介。「記事との区別が曖昧なネイティブ広告はダメ」「ジャーナリズムは、食えなくても好きな人間がやる演劇に近くなっていく」「既存メディアは肥大化して制度疲労」。刺激的な指摘が続いた。動画必見。

■7・26(火) 著者と語る『デジタル・ジャーナリズムは稼げるかメディアの未来戦略』／司会：橋場義之特別企画委員／出席：85人
8ページに会見レポート

山下 真理 国連平和構築支援事務所次長



国連勤務は25年を超えた。「日本人の気配りは国際公務員に向いている」。国連による平和構築が効果をあげるには「国連事務総長の強いリーダーシップが必要」。また「次期国連事務総長選は、ロシアの影響力がカギを握りそうだ」と予測した。

■7・28(木) シリーズ企画「国連と日本人」⑩／司会：土生修一専務理事／出席：27人

開沼 博 社会学者

竜田 一人 漫画家

吉川 彰浩 元東電社員

東京のメディアでは報道が激減した福島第一原発。「作業員の動きは早朝から始まる。昼だと熱中症になるから」(開沼さん)。「自販機もある。構内でカネが使えるようになった」(竜田さん)。細部に宿る事実をマンガも使って伝えた。「美しい福島!!」(吉川さんの揮毫)のために。

■7・28(木) 著者と語る『福島第一原発廃炉図鑑』／司会：瀬口晴義委員／出席：60人
9ページに会見レポート

核軍縮検証のための国際パートナーシップ (IPNDV)

米国が提唱し29カ国が集まる核軍縮検証の枠組み。東京会合を終えて米日英豪の6人が会見した。「核弾頭や運搬手段の削減、解体を検証する技術を議論した。政治は話さない」とローズ米国務次官補。相手にだまされないよう、見破る技術を事前に相談する国際会議。議論が進む核兵器禁止条約への対応を質問されると日米とも反対論だった。

■7・1(金) 記者会見／司会：石川洋企画担当部長／通訳：友田淳治、矢部道子／出席：52人

アヴィ・ハッソン

イスラエル経済産業省チーフ・サイエンティスト



イノベーションには「コネクティビティー(接続性)」が重要だと説く。産業間だけでなく、官と民、中小と大企業、地元と全国・海外をつなぐことが成功のカギになる、と強調。「政府は、人材育成、税制整備などのインフラ構築とリスク共有に徹すべし」

■7・5(火) 記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：長井鞠子／出席：22人

田邊 揮司良 東京都危機管理監



耐震工学が専門の工学博士で元自衛官。防災にうってつけの経歴。さまざまな取り組みが必要な防災の難しさを「総合格闘技」と表現。厳しい質問にも率直に答えたが、「非常時にトップに必要な資質は？」と都知事選に絡めた質問には「お答えは控えたい」と苦笑い。

■7・8(金) 記者会見「首都直下地震への備え」／司会：山崎登委員／出席：58人
10ページに「首都直下地震」関連のレポート

玉田 芳史 京都大学大学院教授



新憲法草案の国民投票(8.7)を控えたタイ情勢を熱く解説。5人以上の集会禁止など反対派への規制は過酷。「草案可決で国会の軍任命議員は3分の1になり、ミャンマーより非民主的になる」「富裕層など既得権層が民主主義否定のリスクに気づくことが大事」

■7・15(金) 研究会「タイ情勢」／司会：鶴原徹也委員／出席：35人

アフメト・ビュレント・メリチ 駐日トルコ大使



クーデター未遂事件について、「首謀者たちは自国民を狙撃し祖国を裏切った」と批判。「反乱軍の戦車にギュレン派警察官がいた」などを同派関与の証拠として挙げた。「難民に関するEUとの3月合意も何ひとつ実現されていない」とEUへの反発も示した。

■7・20(水) 記者会見／司会：脇祐三委員／通訳：ボアチ・ウリケル／出席：81人
8ページに会見レポート



シリーズのトップバッターはヒッチンス駐日英国大使(7.1)

英国国民投票ショックの余韻さめやらぬ中開かれた3つの駐日大使会見。トップバッターはティム・ヒッチンス英大使。「欧州諸国と親密な関係を維持する」「日本企業の投資促進と保護に全力を尽くす」。まず強調したのが、日本を襲った懸念を払拭すべく「これまで通り変わらない」ということ。国民投票前の4月4日のクラブ会見では、「英国はEUに残留する方が、より強く安全で繁栄する」「世界的な不確実性を前に離脱は無謀」と語った大使だったが、そこは歴戦の外交官だ。

シリーズ「BrexitとEUの未来」 「同床異夢」を克服できるか

さらに、世界5位の経済力、高い水準の高等教育等々、英国の「魅力」や「強み」を繰り返し述べた後、「離脱後は規制緩和がしやすくなり、ビジネスにとって有利に働くだろう」と「離脱の利点」にも踏み込んだ。

離脱に向けたEUとの交渉については、「迅速さより正しい結果を出すことが大切」と拙速を避けるべきことを強調し、「英国がEU単一市場にアクセスを保つだけでなく、EUがさらに自由貿易にコミットした開かれた場所になることが重要」と、国益をしたたかに主張することを忘れなかった。

「離脱後は規制緩和が進展」 英大使

対するハンス・カール・フォン・ヴェアテルン独大使とティエリー・ダナ仏大使による共同会見。独大使は「今やテロなどグローバルな課題に一国だけでは対処できない。離脱派の主張とは裏腹に、英国は対処能力を失った」と厳しい評価。仏大使も「英国の友人が離脱決定するとは予想もしていなかった。衝撃を受け、裏切られたという気

「欧州と英国の深い絆は継続」 独大使

持ちだった」と率直に語った。英国抜きでEU統合が進むとの見方にもくみしない。両大使とも「補完性原則」に言及し、今はいったん立ち止まり、EU、国家、民意の関係を再考すべきとの認識を共有していた。

ただ、今後の英EU交渉に関する発言では立場の違いを見せた。独大使が「英国と欧州のパートナーシップと深い絆は継続する」とやや融和的な姿勢だったのに対し、仏大使は「国民の決定が示された以上、できるだけ早く手続きを進めるのが望ましい」と明言し、強力なEU懷疑派

「国民戦線」を抱える国内事情を垣間見せた。また、独大使が「日本企業、政府は、日本の利益をはっきり英国、EUに伝えるべきだ」と述べたのは、独産業界に英国との自由貿易体制の維持を求める声が強いのを踏まえ、同じ立場の日本にもからめ手からの支援を促したのだろう。

仏大使はこの点、「日本企業が南北アメリカを視野に入れるならロンドンに拠点を残せばいいし、EU中

「早急にEU離脱手続きを」 仏大使

心なら移せばいい」と素っ気なかった。両会見の間の日程で行われたのが、ヴィオレル・イステイチヨアイアール・ドゥラEU大使会見。「われわれは安全、平和、和解など歴史的な成果を誇りに思っている。統合への決意やコミットメントを過小評価しないであらう」と原則的立場を繰り返した。

各者各様だが、一流外交官たちによる老練な弁舌を随分楽しませてもらいました。ただ、平和や和解の理念をEUに託した独仏と、あくまで単一市場として捉えてきた英国との、国家理念の次元にまで至る違いはやはり大きいと感じる。

ユーロ危機では北と南、難民危機では東と西のEU加盟国間で、大きな亀裂が走った。それらはかろうじてつなぎ留められているが、果たしてEUは新たな危機に結束して臨めるのかどうか。欧州発の危機がグローバルな危機に直結する時代となった今、われわれも心して報道を続けねばなるまい。

読売新聞社編集委員 三好 範英

「統合への決意は強い」 EU 大使

英EU離脱

うめはら としや
梅原 季哉

朝日新聞社編成局長補佐

つるはら てつや
鶴原 徹也

読売新聞社編集委員

日本のジャーナリストで欧州を語らせるのに今、この2人以上に適当な人はいないだろう。梅原季哉氏、鶴原徹也氏はともに大陸欧州と英国双方で特派員経験がある。しかも、英国の欧州連合（EU）からの離脱の是非を問う国民投票を現場で取材し、帰国したばかりである。

会見で梅原氏はタブレット端末で写真を紹介しながら、国民投票で離脱派が勝った背景や欧州の将来を整然と説明した。一方、鶴原氏は落語家がまくらを語るように、長年の取材経験から感じていることを思いつくまに語った。2人のキャラクターの違いが感じられ面白かった。

梅原氏は、「離脱派、残留派双方とも寄り合い所帯だったが、離脱派が明確にEUを敵として設定したのに対し、残留派は派内で互いに足を引っ張り合った。運動の熱量は離脱派が高かった」と現場取材の肌感覚を述べた。また、鶴原氏は、「キヤメロンは首相になって以来、一貫して反EUを主張してきた。そんな彼

考えさせられるメディアの役割

がEU残留を主張しても説得力がない。キヤメロンは政権にとどまりたいがために国民投票実施を約束したが、愚かな選択だった」とした。

印象に残ったのは、両氏が投票結果への影響として英国のメディア、特に新聞報道について言及した点だった。

梅原氏は、離脱を主張する大衆紙が根拠のない報道を続けたことについて、具体的な事例を挙げて説明し、「（高級紙）フィナンシャル・タイムズで世の中は動かないことがわかった」と語った。鶴原氏も「離脱派のメディアは平気でウソをついて離脱をあおった。これが国民の判断を鈍らせた」と述べた。メディアの役割について考えさせられる内容だった。

結果については、両氏とも残留を予想していたという。「ロンドンで取材している限り、離脱派にほとんど会ったことがなかった。そのため（自分の見通しに）ややバイアスがかかったかなと思う（梅原氏）」「不明なことに予想を外してしまった（鶴原氏）」と率直に語る姿も好ましかった。英国のEU離脱問題を考える緊急連続会見の最終回を飾るにふさわしい会見だった。

毎日新聞社外信部長 小倉 孝保

民意を読む

にしだ りょうすけ
西田 亮介

東京工業大学准教授

まつもと まさお
松本 正生

埼玉大学教授

安倍晋三首相が責任ラインとした「与党で改選過半数」を確保し、「改憲勢力で3分の2」にも届いた参院選。その直後の連続会見では、新たに選挙権を得た18～19歳が与党に投票した比率が高い、との出口調査が共通の話題に上った。

西田氏は「若年世代の記憶が始まるのは極めて近年だ」と指摘した。旧民主党への政権交代やその政権運営の記憶はほぼない代わりに「2012年に安倍自民党が政権を奪還してからのプロセスの印象が強く、現状肯定イメージにつながった」との見方を示した。

松本氏は、将来不安をめぐる若者の意識調査で「進学」「就職」や「結婚」「子育て」に加え「老後の生活」「親の介護」という先への不安が増えている、と紹介した。「とりあえず現状がこのまま続いてほしい、という守りの志向性が強く、政治的には保守化は当然だ。シルバー民主主義に憤っていない」と分析した。

民進党がいち早く消費税増税の再延期を打ち出した点に、松本氏は

若者の保守化とマスメディアの凋落

「予定通り増税し、将来不安に責任を持つ、とのメッセージの出し方もあった」と言及した。野党共闘が成功したかどうかをめぐって「トータルのプラスマイナスをもう少し考えるべきだ」と慎重な見解を表明した。

メディアへの警鐘も目立った。西田氏は、ネット戦略も含めて政策論争より「イメージ政治」に傾斜する自民党に対し、野党とメディアは憲法問題の争点化に失敗したと総括。「改憲か護憲かの構図だけが生活者に突きつけられ、読み解く手がかりを与えられていない」と懸念した。

主権者教育が立ち遅れ、流動的で不安定な「脆弱な民意」の下で、改憲の是非を問う国民投票となれば、国政選挙に比べて規制がはるかに少ないことから「米大統領選挙型の運動になり、ある種のポピュリズムが促進されかねない」と警告した。

松本氏は政治を初めて認知する高校生の段階で、学年が上がるにつれ政党や国会への信頼度が下がる、との意識調査を示して「この否定的イメージを解消できずに1票の重みを説いても無理がある」と危機感を示した。マスメディアはさらに信頼度が低いとして「インターネットやSNSとの力関係は深刻だ」と述べた。

日本経済新聞編集委員 清水 真人

アフメト・ビュレント・メリチ

駐日トルコ大使

「早期に安定を取り戻す」 国際社会の懸念に反論

「自由は無限ではない。テロを煽る行為は表現の自由として捉えるべきでない」。クーデター未遂から4日後、急きょ行われた記者会見は、トルコ政府の立場を説明する大使と、強権的な政府の姿勢に疑問を抱く記者団とのせめぎ合いの感があった。



大使は「ギユレン師率いるテロ組織が企てたことは明白だ」と強調。その証拠に、クーデターを起こした兵士がギユレン師手書きの文字をお守りとして持っていたこと、戦車の中にいた兵士がギユレン運動のメンバーだと自白したこと

を挙げた。それで5万人以上の拘束や解任、職務停止が正当化されるのか、日本人には理解が難しいだろう。「トルコの各機関に支持者が潜んでいる」。ギユレン運動に関わる全てのの人々を根こそぎ摘発、排除する

ことこそがエルドアン政権の最大の目的であることを、大使自ら言明した。日本国内の関連団体についても活動停止を日本政府に求めているという。しかし、そのギユレン師とエルドアン氏が長年、協力関係にあったことは周知の事実である。

「国際社会からトルコ政府に支持と連帯のメッセージが寄せられた」と大使は述べた。しかし、強権的な捜査方法には欧米諸国から強い懸念が示されている。

トルコ政府が求めたギユレン師の身柄引き渡しにアメリカが応じるかは不明である。死刑制度の復活に関する議論が始まることにEUは警戒を強めている。復活すればトルコのEU加盟の悲願は水泡と帰すだろう。

トルコの外交は重大な局面にある。相次ぐテロと収束の兆しが見えない難民問題、それらの原因となっているシリアの混乱、全てにトルコは鍵を握っており、その不安定化は深刻な結果を招きかねない。

「トルコの民主的な体制は揺るぎなく、トルコ経済が堅調であることが示された。早期に安定を取り戻すだろう」。大使の言葉通りであってほしいと願わざるを得ない。

NHK解説委員長 二村 伸

茂木 崇

東京工芸大学専任講師

「マス」は崩壊した 既存メディアの未来は？

米国の著名なブロガーで、ニューヨーク市立大学教授のジェフ・ジャービスが著した『デジタル・ジャーナリズムは稼げるか』（東洋経済新報社）が日本で発売となった。監修に携わった茂木崇さんが本書を解説。「私自身、共感する部分と意見を異にする部分が半々だ。ジャーナリズムの本質論を議論するたたき台にしてほしい」と語った。

本書でジャービスは、ジャーナリズムを「広義ではコミュニケーションが知識を広げ、整理するのを手助けする仕事」「狭義では何かを主張し、市民の生活に良い影響を与えるために努力すること」と定義する。



その上で、「マスは崩壊した」との認識に立ち、「マス広告がなくなる」とする。しか

し、記事形式の広告であるネイティブ広告については絶対反対の立場だ。記事の課金についても難しいとし、寄付についても警戒する。「ジャーナリズムはページビュー数などマスメディアの発想で動いているが、今後はコミュニケーションの目標達成にどれだけ貢献できたかで計るべきだ」と主張する。

茂木さんはジャービスを「公衆に期待するデューイ型」と規定し、自らをリップマン型とする。米国のジャーナリストのウォルター・リップマンはステレオタイプ論にあるように、公衆には期待していなかった。それに反対したのが米国の哲学者ジョン・デューイだ。ジャービスの言うコミュニケーションとともに問題を解決していくジャーナリズムはデューイ型だとし、「取材相手と一定の距離を置いて観察し、説明したり、批判を加えたりするジャーナリズムの営みがおろそかになる」と批判した。

「既存の報道機関に未来はない」と思っている人が多いが、『ニューヨーカー』誌はいまでも部数を伸ばしている」と茂木さんは指摘し、「過渡期だからこそ古典に学び、歴史に学ばべきではないか」と話した。

朝日新聞Journalism編集長 岡田 力



「い」という共通の思いで、『廃炉図鑑』を編集した。原発周囲まで生活圏が回復している実情を無視し、マレーシア人ジャーナリス

著者と語る 『福島第一原発廃炉図鑑』 福島の実態から目を背けるな

東京電力福島第一原発事故から5年余になるが、廃炉作業の実態や、放射線汚染の現実が、なかなか伝わってこない。背景には、事故を早く忘れたという人々の心理とともに、玉石混交のメディア・ネット情報の洪水に、正確な状況が私たちに見えにくくなっていることが挙げられる。

社会学者の開沼博・立命館大学准教授、漫画家で元原発作業員の竜田一人さん（仮名）、元東電技術者で、廃炉作業を外から支える一般社団法人「AFW」代表の吉川彰浩さん。3人は、立場の違いはありながら、「福島への誤解、無理解があまりに多い。本当のことから、目を背けないでほしい」という共通の思いで、『廃炉図鑑』を編集した。

トが7月に欧米のメディアに配信した「福島ゴーストタウン報道」などに触れ、開沼さんは「事実をゆがめた発信が、福島を世界の中で孤立させ、理不尽な差別の原因となっている」と指摘。自分たちで地道な発信をすると同時に、「声」をもたない福島の人たちと東京、あるいは世界をつなぐ拠点として、「廃炉ラボ」という独立調査研究プロジェクトを立ち上げた。2016年6月に出版された『廃炉図鑑』は、このプロジェクトで「人とつながる手がかりとしての百科事典」だという。

事故を起こした原発の現状、進行中の廃炉プロセス、作業員の心情から、放射線の現状、周辺地域の人々の生活や表情を伝える。人気漫画「いちえふ」作者の竜田さんのイラストや漫画を折り込みながら、読者の興味を自然につなぎ止める工夫も。

「廃炉作業に携わる数千人の作業員の半数は、地元被災地の人たちだということを知ってほしい」と、吉川さん。

冷静に、正確に、でもユーモアを忘れずに：英語での発信も予定しており、福島を直接世界に伝える、貴重なコミュニケーション活動だと受け止めた。読売新聞出身 小出 重幸

左から吉川さん、竜田さん、開沼さん

会見余話

●トルコ報道をめぐり応酬

世界を驚かせたトルコのクーデター騒動発生から4日後、トルコ大使館から「大使が貴クラブで説明したい」と電話があり、ホットな会見が7月20日に実現した。

この会見でアフメト・ビュレント・メリチ大使の「日本メディアのトルコ報道は西欧メディアに依存している」との発言に複数の記者が反発した。

●初の覆面ゲストが登場



当クラブの会見史上、初めて覆面をかぶったゲストが登場した。

『福島第一原発廃炉図鑑』の著者の一人である漫画家の竜田一人さんだ。

竜田さんは2012年と14年に福島第一原発で作業員として働き、その経験を「いちえふ」と題した漫画にして出版した。

「身元がばれるとまた働けなくなるし、これまで雇ってくれた人たちにも迷惑をかけるから」というのが覆面の理由。名前も「たった一人」をもじった筆名だ。プロレスファン

「（日本人の）われわれには報道の自由がある。日本人記者は現場で取材し独自の判断で報じている」「大統領批判ができないトルコの現状は受容できない。おかしいものはおかしいと書くしかない」。これに対し大使は、「政府が規制しているのは、大統領領に対する批判ではなく侮辱だけだ」と再反論した。

緊張した空気が流れたが、外交官歴35年の大使は、「来てよかったです。また来ます」と笑顔で語り、会場を後にした。

で、メキシコのプロレスラー「ドス・カラス」の覆面を通信販売で購入した。さらに、この日は当時の作業服を着て会見に臨んだ。

「もうばれているのでは」との質問には「いわき市では知ってる人は知ってる。でも暗黙の了解で黙ってくれていて感謝です」と明るく答え、会場から笑いが起きる場面も。揮ご



うでも自作の主人公を描いてくれた。

首都直下地震 研究会／見学会

いざ来るに備えて

塚田 博康

熊本から東京へ

東日本大震災、熊本地震と「想定外」の被害が続くなか「30年以内に起きる確率70%」とされる首都直下地震についての企画が始まった。

6月29日には『首都直下地震』（岩波新書）の著者、平田直・東大地震研教授が「熊本の教訓と首都の備え」と題して会見した。

熊本地震は28時間に2度も震度7が襲い、被害を大きくした。平田教授は連続地震について「耐震建築でも強い揺れが続くと危険。大きい地震のあと、48時間は家に帰らないように」と警告し、現行耐震基準は最低限度だと過信を戒めた。

現在、地震の研究、調査は文部科学省、被害想定は内閣府の中央防災



平田直氏

会議が担当するなど、政府内でも防災機能分散していることを例に「地震研究と防災対策の

一致が必要だ」と指摘した。

続いて7月8日には、東京都危機管理監の田邊揮司良氏が、「首都直下地震への備え」の題で都

の対応を解説した。

熊本の被災地に対する都の救援活動が、被災直後の救出、給水袋・簡易トイレなど支援助物資の供給、緊急医療などから、児童、生徒の心のケアまで、さまざまな形で行われたことが詳しく説明された。首都直下地震への実地訓練でもあったのだろう。

参加者からは、非常時の都職員の参集体制、家庭での減災対策、水害との複合災害の危険性など、さまざまな角度から質問が出た。

「東京で一番危険なまち」

7月4日には朝から、墨田、荒川区で、建物倒壊、火災延焼、消火活動困難など、震災のとき被災する恐れが大きいまちを視察した。

墨田区では菅原幸弘防災課長から区の対策について説明を受けたあと、東向島5丁目から玉の井いろは通りを越えて墨田3丁目の東武線鐘ヶ淵駅まで、住宅、



東京都危険度ランキング1位の町屋4丁目。木造建物が密集し、細い路地が不規則に張り巡らされている

アパート、町工場、商店など木造建物密集地域を1時間歩いた。

鐘ヶ淵駅から西へ行くと、隅田川沿いに1・2丁にわたって高さ40以上の階建ての集合住宅が連なる白鬚東防火街区に突き当たる。延焼から建物を守る防火シャッターや放水装置、災害時には4万人の避難場所になる東白鬚公園などがある。まとまった防災街区としては荒川区南千住の白鬚西防火街区とともに、都内でも珍しい存在だ。

午後1時すぎから荒川区役所で、西川太一郎区長と会見。水道が止まった場合に備えて、地下水や河川水を消火用に使う「永久水利施設」など、同区独自の取り組みについて聞いた。

この日、有志の区長が増田寛也氏に都知事選挙出馬の要請をしたことから、質問がそちらに集まったのは



荒川区の西川太一郎区長から防災への取り組みを聞いた

まあ、当たり前か。

会見後、東京都の「地震による地域危険度」総合1位の同区町屋4丁目へ向かい、気温34度という暑さなか、東風谷博・尾久消防団長などの案内で曲がりくねった細い道や、人ひとり通り抜けるのがやっとの路地をたどった。高層の建物が林立する東京とは異なるまちがそこにはあることを体感した。

（つかだ・ひろやす 東京新聞出身）

7月4日の見学会日程
 ▼東向島駅に集合
 ▼墨田区役所防災課会議室で菅原幸弘防災課長らによる説明
 ▼東向島・墨田エリアを徒歩で見学
 ▼白鬚東アパートで見学と施設説明
 ▼南千住エリアをバスで見学
 ▼西川太一郎荒川区長会見（荒川区役所）
 ▼地下水を使った永久水利施設見学
 ▼説明
 ▼荒川区立町屋5丁目住宅（22階建て、高さ75メートル）屋上から町屋・荒川エリアを見渡す
 ▼町屋4丁目を徒歩で見学
 ▼荒川遊園に設置された、隅田川の河川水を利用した永久水利システムを見学
 ▼町屋駅で解散（参加16人）



関数も頭に入っていない

確かに、複数の条件を与えた計算も早いし、グラフの出力も一瞬で「なるほど便利だね」と思える。だが、講師が用意してくれたテストデータを使い、講師の説明通りに操作しているからこそであって、お膳立てなしにゼロから自分で行ってみたいと言われれば、途端に自信がなくなる。

の多機能統計分析ソフトのこと。学術論文でも使われ、統計分析の世界では共通言語になりつつあるものだ。今回はこれを使って、野球や参院選のデータを分析してみようという試みである。

データ分析 統計ソフトR入門 さらばエクセル ビッグデータ時代の強い味方

7・19(火) 講師：松波功・中日新聞電子編集部／出席：23人+ネット視聴3人

「これを便利だと思いませんか！」と講師が力説すると、会場から笑いが漏れた。その時の私の心の声は、こうだ。「いや、先生、エクセルの方が簡単ですよ」。

第4回は「R入門」。

い。だから、しまいに思ってしまった。やっぱりエクセルの方が簡単じゃない、と。

だが講師は言う。「エクセルの方が簡単だと思われるが、それは扱うデータが小さい時だ」。そう、時はビッグデータの時代。1万行以上もあるような巨大データを前にエクセルでは歯が立たない。便利さをまだ実感できないのは、扱っているデータが小さいからに過ぎない。新たな報道手法として注目されるデータ・ジャーナリズムしかり、これからは膨大なデータを素材にして、そこから「何か」をあぶり出す作業が増えてくるに違いない。Rはそんな時こそ威力を発揮する。なるほどね。

さて、今回の講座をもって必須IT講座の基本の「き」は学び終えたらしい。講師いわく「全ての道具はそろった」そうで、今後はどう生かすかが問われることになる。正直、身に付いたのかと問われれば、答えは否だ。だが、「こんな時はRを使えば」「正規表現を使えばできたような」というように、取っ掛かりを得ただけでも十分な成果といえよう。最後にこの場を借りて講師の皆様に心より感謝を申しあげます。

神奈川新聞社デジタル編集部

小野 たまみ

■会議報告

●第375回会報委員会

(7・11 大会議室)

7月号について意見交換した後、8月号、9月号の編集を協議した。2015年3月号まで連載していた「地方発」ページを、地方メディアに寄稿してもらおう趣旨は変えず「新・列島報告」と改題し、8月号から再スタートすることを決めた。このほか「ワーキングプレス」被災地通信のテーマについても検討した。

出席 飯塚委員長、稲沢、大辻、吉澤、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

●第465回企画委員会

(7・15 10階Bホール)

新委員の石川徹・北海道新聞東京編集局長(旧・加藤利器氏)、久保勇人・日刊スポーツ新聞編集局長

(旧・宇留間和基氏)、袴田健・テレビ東京報道局取材センター部長(旧・堀靖彦氏)があいさつした後、6月21日の参院選党首討論会を振り返り、今後の運営について協議した。そのほか、7月13日実施の東京都知事選共同会見についての報告、今後のシリーズ企画のテーマやゲスト候補などを検討した。

出席 西村委員長、恵村、安井、服部、倉重、坂東、福本、橋本、鶴原、脇、別府、宮田、榊原、軽部、石川、山本、瀬口、久保、島田、山崎、小栗、袴田、梶本、橋場の各委員。

●第467回会員資格委員会

(7・21 小会議室)

8月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 増田委員長、菊池、石田、新堀、小池、山本の各委員。

第4期記者ゼミ 今後の予定

現役記者を対象にした記者ゼミは8月4日で前期の講座が終了しています。今後は下記のように予定しています。

★前期総復習集中セミナー

9・10(土)10:00～17:00 / 9階会議室

(コマンドライン・GISの復習、野球ビッグデータ・米大統領選の関連データ利用例紹介、講師陣による個人指導など。終了後懇親会(会費4000円)あり)

★後期スケジュール(年内)

◎9・20(火)第7回「エクセル さらに活用術(上級)」

◎10・4(火)第8回「データ・フォーマットを使い分ける」

◎10・18(火)第9回「スクレイピング入門」

◎11・1(火)第10回「Javascript入門」

◎11・15(火)第11回「GoogleMap/Leaflet入門」

◎12・6(火)第12回「Python入門」

上記セミナー、ゼミに参加希望の方は社名・氏名を明記のうえseminar@jnpc.or.jpまでご連絡ください。

参院選 世論調査

池田 健夫(共同通信社)

試行錯誤の新有権者把握
合区が課題あぶり出す

今回の参院選では、70年ぶりとなる選挙権年齢の引き下げで新たに有権者となる18、19歳の意識をどのように探るか。共同通信だけでなく、報道各社の取り組みは試行錯誤の連続だった。2つの県で1つの選挙区を構成する「合区制度」は世論調査や選挙報道だけでなく、参院選の選挙制度の在り方で多くの課題をあぶり出した。

18、19歳の意識調査
手法、設計に苦慮

選挙権年齢を引き下げる公選法改正は、参院選のほぼ1年前の15年6月に成立した。選挙権年齢引き下げが具体的な政治日程に上って以降、部内では新有権者の意識をどのように探るか、検討を重ねていた。

新有権者の全有権者に占める割合は2%程度にすぎない。しかも、対象者は高校生、大学生だったり、社会人だったりして、一網打尽にできるような場がない。全国的にこの層

の縮図となるように調査対象を抽出するには、通常行っているRDD(ランダム・デジット・ダイヤリング)法による電話世論調査では効率が悪すぎる。

まず、きちんと統計学的に対象者を抽出した世論調査が必要と判断し、全国60地点から新有権者1500人を選び、年明け2月～3月にかけて郵送法による世論調査を実施した。827人から回答を得て、調査結果は5月5日付朝刊用出稿、選挙権を得たことを評価する回答は77%だった。

参院選前後でも、新有権者の意識動向を探る必要があると考え、通常国会終了後から公示前2回、選挙期間中1回、選挙後1回の計4回、ネットモニター調査を実施した。全国的にこの層を対象に世論調査を設計するのは困難だった。

新有権者に関しては、その投票先についての関心が高かった。ただ、各選挙区単位のサイズの小さい情勢

調査で、18、19歳の回答者が1桁前後しか期待できない調査から新有権者の動向を分析するのは、世論調査としては厳しいものがあつた。

むしろ、新有権者が選挙にあたって何を重視しているかなどを探り、政党や選挙、主権者教育の現場へ情報を提供することを何よりも重視した。その意味で、「政党が若い人に分かりやすく政策を訴えていると思わない」との回答が、投票まで一貫して8割台だったのは、残念だった。

選挙制度の見直し
格差是正に多様な民意

もう1つの大きな制度改革だった「合区」については、昨年末に関係4県の地元加盟社と合同で電話世論調査を実施した。合区制度への賛否をみると、反対が65・8%で、賛成は18・3%だった。

合区制度への否定的な見解は、当該4県だけにとどまらない。共同通信と加盟社でつくる「日本世論調査会」が昨年12月に実施した面接世論調査でも、参院の選挙制度の将来像として、合区による「1票の格差」是正策を挙げたのは20%にとどまり、「都道府県単位で代表を選ぶことを優先する」37%、「現行制度を抜本的に見直す」34%が上回り、多

様な民意が示された。

参院選で、合区の対象となった高知と徳島、鳥取で、それぞれの県の最低投票率を更新したことで、当該県の民意はうかがえる。

そもそも、1人区という「小選挙区制」と、複数人区という「大選挙区制」が混在している現行の参院選挙制度は、選挙区の代表を選べる数に差があるという点で政治的に大きな不平等を抱えている欠陥制度だ。最高裁判決が指摘するように、現行制度を維持したまま格差を是正するのは不可能であり、制度の見直しこそが求められているのだ。

今後も、時の課題と向き合い、適切な調査手段を選択し、恣意的な設問や解釈を排することなどに留意しながら、有用な世論調査を実施していきたい。

ただ、世論調査はあくまでも脇役だ。どんなに精度を上げても、完璧な国民の縮図をつくれず、扱いは節度が求められる。国会でも、世論調査に基づいた質疑が聞かれるが、政治家自身が聞いた有権者の声や本人の信念に基づいて発言しなければ、国民の胸には響かないだろう。

いけだ・たけお▼1987年入社 徳島支局 生活報道部 政治部などを経て2013年9月から総合選挙センター次長

米大統領選 共和党全国大会

國枝 すみれ(毎日新聞社)

喝采とブーイングの嵐 変貌の瞬間を目撃した夜

「銃声か!?」。報道陣が一斉に音のした方向に向かって駆け出した。実際はタイヤがパンクした音だった。

米中西部オハイオ州クリーブランドで7月18〜21日に開かれた共和党全国大会で、暴言で知られる実業家ドナルド・トランプ氏が大統領候補に正式指名されるため、会場周辺は厳戒態勢だった。トランプ氏に抗議するデモ隊が押しかけて支持派と衝突するのでは、と危惧されていたからだ。

しかし、ふたを開ければ、デモ隊はトランプ支持派、反対派ともに数百人しか集まらず、登録数7万人とされた報道陣、5500人の警官のほうに圧倒的に多く、手持ちぶさたの記者が会場近くの広場に集まった抗議者を片っ端から取材し、トランプ氏とは何の関係もない主張を叫ぶ宗教団体を警官が取り囲んで守る、という滑稽な状況が繰り返された。一方、党大会の会場となった多目的競技場では混乱が続いた。メデイ

アセンターはシャトルバスで10分ほど離れていたもので、競技場の客席にまぎれこむことにした。

入り口に立つボランティアは人によって言うことが違うので、席から追い出されないか、と不安になる。専用の中継部屋がある米国の大手テレビ局や、机やインターネットが確保されている新聞社がうらやましい。

「ユタ州が企んでる」
椅子に上がるしかない!

競技場は円形だからどの入り口も同じに見える。「ステージを時計の0時とすると、10時の方角にいます」と、携帯電話に向かって怒鳴り、同僚に自分の位置を知らせる。

各州の代議員が投票する19日、「ユタ州が何か企んでる」との情報が入った。1時間だけフロア(競技場の底)に立ち入ることができると、ユタ州の代議員を報道陣が取り囲んでいた。

輪に入れない写真記者らは周囲の椅子の上に土足で上がり、カメラを向ける。遠慮していたが、大きな米国人に視界を遮られては仕方がない。私も椅子に上がる。「何よ、この人たちは! 座れないじゃない」。代議員の女性が怒っている。当然だ。ユタ州は全員の票を、トランプ氏ではなく、最後まで指名を争ったテッド・クルーズ上院議員に投じて喝采を浴びた。怒っていた代議員も携帯電話で撮影していた。

トランプ支持・不支持
「終わり」はどっち?

面白かったのは、代議員と一般党員の認識の落差だ。代議員の中には、



共和党全国大会で、ユタ州の代議員を取り囲む報道陣(米中西部オハイオ州クリーブランド/7月22日/筆者撮影)

従来の共和党の政策と全く違うことを言うトランプ氏を指名することは「共和党の終わりだ」と強く信じる者もいた。しかし、会場の客席を埋めた一般党員にとっては、トランプ氏を支持しない共和党こそ「終わり」だった。

党員はトランプ氏を支持しなかったクルーズ氏にブーイングを浴びせた。隣にいた女性は「彼の政治生命は終わりだ」と激怒していた。

トランプ氏が指名受諾演説をする最終日、会場はやつと満席になった。「米国を再び偉大な国に」「米国を再び安全に」「米国第一主義」。地鳴りのように沸き起こる「壁を作れ」の大合唱。

何も聞こえない。混み合う観客席から脱出できなくなった。コンピュータを膝に置き、床にノートを開いて記事を書き始めるが、冷房で冷え切った手の指がうまく動かない。さんざんな夜だった。

しかし、楽しかった。確信したからだ。11月の選挙結果にかかわらず、この夜は分水嶺になる。共和党が変貌し始めたその瞬間を目撃できた喜びがひたひたと押し寄せてきた。

くにえだ・すみれ▼1991年入社
メキシコ・ロサンゼルス駐在などを経て
16年4月からニューヨーク支局長

被災地通信④ 福島県葛尾村

避難指示解除から2カ月 強制避難から新しい村づくりへ

米谷 量平 (福島民報社)

東京電力福島第一原発事故で全村避難していた福島県葛尾村は6月12日、避難区域のうち帰還困難区域を除く居住制限、避難指示解除準備の両区域が一括解除された。人口は1500人弱。避難市町村で最も人口が少ない村だ。避難区域解除から2週間余が過ぎた6月30日現在、村内で生活を始めた住民は61人。対象人口1348人の4・5%に当たる。住民への取材を続けると帰還の難しさが浮かび上がった。

「まだ戻らないよ。仮設(住宅)があるうちは動かないよ」。2区域の避難指示解除から、もうすぐ2カ月

がたつ。葛尾村から30キロほど西の三春町にある仮設住宅では、避難指示解除前後で住民の動きに大きな変化は見られない。

住民からは「葛尾村にある」古い家が壊されないと住む家が建てられない「買いたい物ができる場所や医療機関がない」といった復旧の遅れを指摘する声が聞かれる。「息子や孫が帰らない」「通っている病院が近くにある」など現在の生活環境から離れられない実情を訴える人もいる。「早く古里で暮らしたい」と解除後すぐに帰還した人もいるが、それは全体から見れば少数だ。

■商店は？ 診療所は？ 遅れる住環境の整備

政府の避難指示解除の要件は①年間積算線量が20ミリシーベルト以下



避難指示解除に合わせて催された「かつらお復興祭」で会話を楽しむ村民(葛尾村/6月12日/筆者撮影)

②日常生活に必要なインフラや生活関連サービスがおおむね整っている③県、市町村、住民との十分な協議の3点。このうち②に含まれるはずの住環境の整備が進んでいない。

葛尾村内で環境省が行う被災家屋解体に申請した357件中、解除前に完了したのは49件。政府は解除段階でも申請の2割に達していない解体率について「帰れる人から帰るため」と説明する。これに対して、住民からは「避難指示が解除されているのに古い家が解体されていないのは対応が遅い」と不満が漏れる。

村内には食料品などを扱う商店や診療所もない。買い物環境を充実させるため、他地域では行政主導でコンビニエンスストアや商業施設を整備する動きが出ている。しかし、人口規模が小さな葛尾村は地元業者が淘汰される可能性が高い。医療機関も震災前は村営の診療所が1つあっただけ。今後の行政規模を考慮すると、村では手を打ちにくいという。

■5年超の避難生活 帰還に踏み切れない現実も

葛尾村は原発事故により強制的に古里を追われた。2011(平成23)年3月14日夜に避難を開始。福島市から会津坂下町に移り、同年6月、

三春町に村役場三春出張所を設けてようやく落ち着いた。度重なる移動により、一つ屋根の下で生活していた三世代家族がばらばらになったケースもある。避難生活が5年以上経過し、現在の小学生は古里の校舎を知らない。それでもそれぞれの立場で新たな生活環境に順応した。帰還には5年のうちに染み付いた避難先での生活を再び変える必要がある。郷土愛か生活環境か。帰還は住民一人一人の価値観に委ねられている。

報道で「帰還率」という言葉を耳にする。報道される帰還率は事故当時ではなく、現在の住民登録者数のうち避難指示が解除された地域で生活している人の割合だ。避難住民の帰還だけではなく、新たな移住者も帰還率を高める要因になる。

葛尾村で生活を始めた61人のうち5人は新たな移住者だ。震災直前に首都圏から移り住み、今年3月末にカフェを開業した夫婦もいる。「日山や五十人山など自然豊かな風景が好き」「何もない」がある「など感じる魅力は人それぞれだ。」「帰還」昔に戻す」ではなく、葛尾を住みたい場所にすることが再生の一步となる。

まいや・りょうへい▼2009年入社
社会部 須賀川支社などを経て 15年か
ら田村支局長

新・列島報告① 鹿児島県知事選

「敵失」で誕生 多難な船出の三反園県政

木場 志郎
(南日本新聞社)



辛勝だったが、一騎打ちとなった2、3期目は、今回と同様に自民党県連や推薦団体の支援を受け、組織力にものをいわせて楽々と当選した。

ただ、3期目に入り県民の批判が高まる。大型事業の内容を唐突に変更したり、上海―鹿児島間の定期航空路線維持のためとはいえ、県職員千人を全額税金で上海に派遣する計画を打ち出したりして、「説明不足」「税金の無駄遣い」といった批判を受け、解職請求(リコール)運動にまで発展した。女性蔑視と取れる発言で物議を醸したこともある。さらに自身に対する報道への不満からか

7月10日投開票の鹿児島県知事選で新人の元テレビ朝日コメンテーター三反園訓氏(58)が、4選をめざした現職伊藤祐一郎氏(68)との一騎打ちを制した。選挙戦の取材を通して、この結果は、三反園氏が選ばれたというより、伊藤氏を選びたくないという有権者の意思表示だったのではないかと感じている。

高まっていた現職批判

元総務官僚の伊藤氏は2004年に初当選し、就任時451億円あった財源不足を11年度から解消するなど安定した県政運営を展開。選挙も4人の保守分裂選となった04年こそ



鹿児島県知事選で当確を喜ぶ三反園氏(南日本新聞社提供)

取材拒否が増え、説明責任を果たさない姿勢が浮き彫りになっていた。鹿児島県では、伊藤氏を除く公選制後の知事6人はいずれも3期までに勇退し、4選に挑むのは伊藤氏が初めてだった。だが、本人への反発を含む多選批判を深刻に受け止めて、楽観視していた節がある。結果は8万4千票差の完敗。ある自民党関係者は「好感度の低さが全てだった」と言い切った。

「4選阻止」の一点突破

今回は3期12年の伊藤県政を有権者がどのように評価し、継続と刷新のどちらを選ぶかが焦点だった。南日本新聞は多選問題や理想の知事像を考える連載のほか、マニフェスト(政策綱領)の比較、政治信条や人柄を伝えるアンケートなど、さまざまな記事を掲載した。ただ、正直言つて、当初は盛り上がる選挙になるとは思わなかった。対抗馬の三反園氏が力不足とみられていたからだ。

三反園氏は、伊藤氏の4選出馬表明から約1ヵ月後の15年12月末、立候補を表明した。テレビ局の政治記者として一定の知名度があったものの、組織はなく、草の根の活動は見えづらかった。しかし、「4選阻止」の一点に絞って訴え、保守・革新を

問わず伊藤氏の批判票を掘り起こし、次第に存在感を増した。

熊本地震後、停止を求める声が強まる川内原発(薩摩川内市)運転継続の是非には「停止して点検すべきだ」と訴え、「停止の必要はない」とする伊藤氏と真正面からぶつかった。告示直前には、ほかに出馬表明していた反原発団体メンバーとの候補一本化も果たし、勢いに乗った。多選には、「問題なし」とする伊藤氏に対し「弊害がある。自分は3期まで」と主張した。陣営関係者は、伊藤氏との違いを明確にしたことで「伊藤県政よりはまし」という弱い支持が増えたとみる。

投票率は56・77%で、前回12年を12・92ポイント上回った。参院選との同日選効果もあるだろうが、盛り上がった知事選だったことは確かだ。

ただ、行政経験のない三反園氏の公約は、財源や工程を示していないものが多く、実現可能性を疑問視する声は少なくない。民意は一枚岩ではなく、失望させると一気に離れ、県政に混乱が生じかねない。多難な船出となる三反園県政を、厳しくみていく必要があると感じている。

こぼ・しろう▼2005年入社 地域報道部 社会部などを経て 14年から報道部



アポロの月着陸 意外にも環境問題に火をつけた！

柴田 鉄治



しばた・てつじ
1935年生まれ 59年朝日新聞社入社 科学部長 社会部長 出版局長 論説主幹代理などを経て 朝日カルチャーセンター社長 国際基督教大学客員教授などを歴任
著書に『科学事件』『新聞記者という仕事』『国境なき大陸、南極』『原子力報道』など多数

日本の科学報道は「産みの親が原子力、育ての親が宇宙開発だ」といわれている。確かに1957年のソ連の人工衛星、スプートニク1号の打ち上げから始まった米ソの華麗な宇宙開発競争は、科学技術の発展を人々に強く印象づけると同時に、メディアにおける科学報道の重要性を確固不動のものとした。

その宇宙開発の頂点ともいべきニュースが69年のアポロの月着陸である。今から振り返ってみても、20世紀最大の科学ニュースだったといっても過言ではない。

朝日新聞社では、「他の天体にまで人間を送り込むような技術を米国はどうやって達成したのか。その秘密を探れ」という社命の下、正田桂一郎記者をキャップとする記者4人とカメラマン1人の取材班を4カ月前から米国に送り込んだ。

私はその取材班の1人として、全米各地を3カ月にわたって走り回った。なにしろNASAの施設だけでもワシントンの本部、ロケットを統括するハントビル、マーシャル宇宙センター、打ち上げ場のあるフロリダのケネディ宇宙飛行センター、宇宙飛行を管制するヒューストンの有人宇宙飛行センターと各地に散らばっている。

宇宙船やロケットの製造企業は約2万社、関係する大学や研究所は約200、総経費8兆円というビッグプロジェクトである。私は、主としてロケットや宇宙船の下請け・孫請け工場などを担当したが、取材を終えて集まった取材班の結論は、「これだ！といった『技術突破』は何もない。強いって挙げれば、不良品は通さない品質管理の技術を徹底したことだろう」となった。どんな小さな下請け・孫請け工場へ行っても、こんなポスターが貼ってあ

った。「月ロケットは560万個の部品からできている。もし信頼性が99・9%なら、なお5600個の不良品が残る」と。人間を月に送り込むには信頼性が99・999999%くらいでないといけないのである。

そのため、どこの企業へ行っても品質管理の部門が大きな比重を占めていて、チェック、チェック、またチェックである。

宇宙に残ったアポロ6号の事故原因を、地上に残された製造工程の詳細なデータから突き止めていくストーリーを軸に、そんな品質管理の話を「NASA——米航空宇宙局」という17回の連載記事にまとめたが、その取材を通じて私はふと、米国社会の特徴を見たように思った。

をえりすぐって、万全を期すに違いない。ところが、米国では誰にでもやる代わりに、厳しいチェック体制を敷いて、不良品をはじき出す。その底に流れている思想は、人間は誰でも間違いを犯すものだ、だから、間違わないようにするより、間違いを見つけ出すシステムを確立するほうが大事だ、という考え方である。

◆「小さな青い地球像」の衝撃

7月20日、世界中から約3000人の記者団が詰めかけたヒューストンの有人宇宙飛行センターの記者室の大きなスクリーンに、月からの映像が映し出された。アームストロング船長の第一歩は「左足から」と決まっております、その第一歩とともに何かしゃべったが、その内容は米国人の助手たちにも分からず、あとで東京本社から聞いて記事にしたことを覚えている。

「この一步は小さいが、人類にとっては偉大な前進だ」という月からの第一声は、事前に用意していたもののようで、妙に理屈っぽく、初めて月を踏んだ驚きや感動といった、胸にずしんとくるものがなかった。

私はその前年の68年、南極点に立つて昭和基地からの極点旅行隊を取材した。アムンゼンとスコットの南極点一番乗り競争から57年、アムンゼンに敗れたスコット隊が帰途に全滅した悲劇は、どこで遭難したのかも翌年まで分からなかったのだ。それからわずか半世紀余りしかたっていないのに、「月への一番乗り」は現場からテレビで生中継される世の中なのである。

未知の土地に一番乗りをするという同じ探検でもこんなにも違うものかと、そんな感慨を秘かに胸に抱きながら、興奮のつぼと化した記者室の様子を、本社とつなぎっぱなしの電話で「勧進帳」で送り込んだことを思い出す。

人類が地球以外の天体に一步をしるしたことは、まさに文明史上の一大壮挙であり、このニュースが新たな地平を開くに違いない、と取材班は終わった後、そう総括した。

その新たな地平は、意外や意外、全てが終わってしばらくたってから静かに現れた。

環境問題に火がつき、あつという間に世界中に燃え広がったことである。

環境問題はアポロの前からあった。日本でも水俣病や四日市ぜんそくなど、ひどい公害が各地で起こっている。「環境問題はアポロとは関係ない。公害がひどくなって限界を超えただけだ」と言う人もいるが、それでは、世界中で一斉に燃え広がったことや、一気に地球環境の危機にまで関心が広がった説明がつかないだろう。

やはり、宇宙飛行士が月から見た「宇宙に浮かぶ、あの小さな、青い地球像」が、科学技術の発展を放置したこの地球環境がもたない、と気づかせてくれたとみるべきではないか。

とにかく、日本でも70年という年は、政治から経済、学生運動に至るまで環境問題が主役に躍り出て、メディアの報道も公害や環境問題一色だったといっても過言ではなく、政府が環境庁(現・環境省)の設置を決めたのもこの年だ。

科学技術は、経済発展の源泉だといわれていたのが、一転、地球環境を破壊する元凶だ、となったのだ。つまり、「科学技術の進歩は人間を幸せにするとは限らない」という当然のことに、人類は皮肉にも、科学技術の頂点とも言うべきアポロの月着陸によって気づかされたのである。

◆アポロの余話、2題

アポロとは関係ないが、その後の余話を2つ、紹介しよう。

1つは、アポロの月着陸から30余年が過ぎ、私が新聞社を退社して大学で「科学技術と社会」という講義を持つていたときのことである。アポロの月着陸とそれがもたらした地球環境問題について、前記のような体験談を話していたところ、学生の手が上がり「先生！アポロは本当に月へ行っただけですか？」と質問されて、私は仰天した。「だって、月から生中継された映像があったでしょう」と言うと、学生は「映像なんて簡単に捏造できますから」と言うのである。

あとで調べてみたら2001年に米国のFOXテレビが制作した「陰謀説、本当に人類は月面に降り立ったのか？」という番組を、日本でもテレビ朝日が放映し、学生はそれを見て疑問を抱いたことが分かった。内容は、月面での宇宙飛行士の映像を示して、空気の無い月面で旗が風になびいているように見えることや、影のつき方が不自然なことを指摘して、月ではなく地上の砂漠でロケをしたうえ、スローモーションで放映したものだといっている。

米国では、この番組で国民の20%が月着陸を信じていないと報じられ、NASAがあわてて「行ったことは間違いない」と言明したという話まであったそうである。

もう1つの余話は、本当の話である。私がアポロ取材から日本に帰国したと

き、日本は欠陥車騒動の真っ最中だった。トヨタのコロナ、日産のブルーバードに米国で欠陥が見つかり、こっそり修理しているのはずるいという米紙の報道をきっかけに、「欠陥なぜ隠す」と朝日新聞が報じたことが、その騒ぎの発端だった。

折から日本でも庶民が車を持てるマイカー時代のはしりで、車への関心が極めて高く、トヨタ、日産だけでなく、ホンダもスバルも三菱もと、欠陥を訴える情報が各新聞社に殺到し、来る日も来る日も欠陥車の記事が載らない日はないような状況が続いた。

自動車メーカーは、新聞の大スポンサーである。「日本の新聞は日本の自動車産業をつぶす気か」とねじ込んできたが、新聞社のほうも「車に欠陥があれば、走る凶器だ」と一歩も引かず、欠陥車キャンペーンを続けた。

自動車メーカーの技術者たちは、どうしたら欠陥車をなくせるか、と必死に研究した結果、私たちアポロ取材班が連載「NASA」で指摘した宇宙・航空産業の品質管理の技術を、米国の自動車業界より一歩早く導入することによって、一気に品質を高めることに成功したのである。

日本の新聞が日本の車を世界のトップクラスに押し上げたと言ったら傲慢に過ぎようが、メディアのチェック機能が有効に働いた1つの実証例だといえよう。

マイBOOK マイPR

■世界最古の日本国憲法

三山 秀昭（広島テレビ放送社長）

オバマの歴史的広島訪問の渦中で元NHKの手嶋龍一氏や作家の門田隆将氏が「オバマを広島に招いたキーマンの1冊」とPRしている。被爆者、広島市民の声を「オバマへの手紙」として1472通をホワイトハウスに届けてつないだのは事実だが、この本はオバマとは全く無関係。憲法論議は改憲論、護憲論とも「論」が先行するので「論よりファクト」と事実に基づき検証した。出版がオバマの広島演説の日（5・27）で、出版社を紹介してくれたのが、オバマと抱擁した森重昭さんなので因縁を感じる。



潮書房光人社 1944円

■時代観照 福島・沖縄そして戦後70年へ

池田 龍夫（毎日新聞出身）

時代の流れ検証の手がかりに 戦後70年を機に、戦後史を見つめ直すことは重要です。そこで、自民・公明連立政権による安保法制強行採決に至る約5年間を検証しました。平和憲

法を破壊して、戦争ができる国家へ突き進む安倍晋三政権と、それに真正面から抵抗する市民の記録をまとめました。歴史の岐路に立つ今日、私たちの明日を考察する際に、拙著が「時代の流れ」を検証する手がかりになれば幸いです。



社会評論社 2484円

■テレビは男子一生の仕事 ドキュメンタリスト牛山純一

鈴木 嘉一（読売新聞出身）

「テレビの一期生」の光と影 日本映像記録センター代表だった牛山純一さんは、1984年度の日本記者クラブ賞を受けた。これと芸術選奨文部大臣賞、放送文化基金賞の三冠に輝いた放送人は、ほかにはNHKの相田洋さんしかいない。テレビ放送が始まった53年、日本テレビに入り、民放初のドキュメンタリー番組『ノンフィクション劇場』や『ベトナム海兵大隊戦記』すばらしい世界旅行』などを手がけた。国内外の秀作を収集・公開する日本映像カルチャーセンター創設、ビデオライブラリー設立運動、日中テレビ祭開催など、時代の先を見通す先見性と行動力でも大きな足跡を残した。放送担当記者としてその仕事と人となりに接し、67年の生涯の「光と

影」を描くことは積年の宿題だった。没後20年目に際し、この評伝が再評価の機運につながれば本望だ。



平凡社 2376円

■大学入試改革 海外と日本の現場から（読売新聞教育部長）

古沢由紀子（読売新聞東京本社教育部長）

国内外の最新事情 2020年度、大学入試センター試験に代わる新テストが始まる。東大、京大が推薦・



中央公論新社 1620円

AO入試を導入するなど、個別の改革は動き出している。そのモデルとなるのが、米国の有力大の入試。書類選考や面接で「潜在力」まで見極めるという選考を現地取材した。韓国、台湾でもグローバル化に対応し、米国型入試への転換が進む。日本の入試は、どう変わるべきなのか。読売新聞連載記事に大幅加筆し、大学入試が社会に与える影響も考察した。

寄贈書

『風雨東京路——日本報道50年』

北京で出版 中日記者交換50周年を記念して、北京中日新聞事業促進会編集の『風雨東京路——日本報道50年』が6月、北京で出版された。1964年9月、まだ国交が回復されない中日間で廖承志—高碕達之助覚書で記者交換を実現した。以来、日本駐在の中国人記者が220人を超えた。初代駐在記者の劉徳有、劉延州が健在。数十名の日本駐在経験者や現職の日本駐在記者の経験、感想、思い出などを綴ったものを、この1冊（中国語）に収めた。

中には、報道現場での経験や中日



関係に関する思考、日本関連報道から得たもの、日本国民との交流、右翼勢力への批判など、さまざまな内容が盛りこまれ、50年間にわたり日本駐在記者が歩んできた日々を余すところなく再現しようと意気込んだ。また当時の周恩来総理・鄧小平副総理などが日本の要人、新聞記者と会見した写真なども入り、「中日ジャーナリズム交流略史」ともいえる資料的価値が高いと評価された。クラブに寄贈したので、ラウンジの書棚で手に取ってほしい。

蘇海河（中国経済新聞東京支局長）

私が会った
あの人

真摯な怒りの人

免疫学者・能作家 多田富雄さん

羽原 清雅（朝日新聞出身）

免疫学者としてノーベル賞候補にのぼり、能作家として知られ：といった人物と、なにが接点での付き合いなの？と多田先生の長年の秘書さんにいぶかられたが、あえて言えば、「酒縁」だろうか。

発端は、酒田の物書きで先生が盟友とした水戸部浩子さん（1945～2010）から「とにかく面白い方なの！」と誘われて山形へ。彼女主宰の「点晴塾」なる若者たちの勉強会で、初めて多田富雄先生（1934～2010）にお会いした。

「浩子さん、悲しいよ。僕も間もなく行く」と弔電を送った77日後に、先生も逝った。

上喜元などの地酒を若者たちと酌み交わし、翌日その酒蔵に案内され：そんな出会いだった。

「免疫など、まったくわかりません」と予防線を張ると、ニコリ

として「そりゃ、当然でしょ」と言いたげ。以来、気は楽に。

帰京後、ワインに肉を好むと知らず、神田の居酒屋にお誘いした。

千葉大学当時の恩師が実験にあたり「文献など読むな。自分の目で見たものを信じよ」と厳しく言われた話、式江夫人（医師）との新婚当時、押し入力で実験用のマウスを飼い、子どもはたんすの引き出しに寝かせた話を、楽しそうに話した。小生は少し政治の話を。次第に打ち解けられる感が。

そのころから多田先生の執筆活動が盛んになる。美術や文学など多彩な関心と蘊蓄があった。

主たる対象は能。高校時代に小鼓を覚え、のちに能面を打ち、能作に入る。脳死と臓器移植をテーマとする新作能「無明の井」を、ごく親しい観世流・八世橋岡久馬師（1923～2004）が演じた。

先生にとくに親しみを感じたのもそのころだった。というのは、能の主題が、いわば社会の一断面をえぐるものだったからだ。朝鮮人強制連行を取り上げた「望恨歌」、原子力とアインシュタインの「石仙人」、戦争3部作の「原爆忌」「長崎の聖母」「沖縄残月記」。

そして今年4月の七回忌初演の「生死の川―高瀬舟考」は鵲外を踏まえた安楽死の問題である。

政治が避けて通りたい、だがそれではすまされない課題を、先生は直視する。

2001年5月、脳梗塞、右半身まひ、言語・嚥下障害に襲われる。リハビリに打ち込む一方、キーボードの文字を音声に変えて語り、パソコンで原稿を書く日々だ。ある日、車



多田富雄さん（左）と筆者（筆者提供）

いす用のエレベーターのある新居に招かれ、奥様の見事な手料理をいただいた。先生は喉元を通るよう、ワインや日本酒に薬剤を入れてドロリと凝固させて飲む。それまでして飲むか、と学んだ。かつてと変わらない明るさがあった。

先生はある日、真剣に憤る。06年4月、国は医療保険の対象であるリハビリを発症6カ月で打ち切るとした。障害がその間に直らなければ死ね、寝たきり老人になり衰弱死を待て、社会脱落、尊厳喪失、そして死：これが「福祉国家」か、と行動を起こした。自ら車いすで44万人の署名を厚労省に持ち込んだ。

書棚に今、先生から贈られた20数冊の著作が並ぶ。先生を惜しむ書や言葉も多彩だった。同感したのは、先生と対話した石牟礼道子さんの「よつぽど精神のほりが深くて、深淵で、劇的な存在」。蛇足承知で付け加えさせてもらおうと、「真摯な怒りの人」だろうか。（はばら・きよまさ 元西部本社代表）

次号は飯田和郎会員（RKB毎日放送）です。

ニュースパーク リニューアルオープン



一般公開に先立ち内覧会が行われた

ニュースパーク（日本新聞博物館）が7月20日、約1年間のリニューアルを終え新たにオープンした。日刊新聞の発祥地である横浜・日本大通りに2000年10月に開館したが、設備の老朽化もあり昨年8月から休館し、2～5階まであった展示スペースを2～3階の2フロアへ集約した。

今回のリニューアルでは、「コレクション（資料）を見せる展示」から「体験や考えることをベースにした展示」を心がけた。現代の情報社会を映像と音で体感してもらうほか、展示を通じ新聞やジャーナリズムの役割に理解を深めてもらうのが狙いだ。

このほか、横浜港周辺のジオラマを作り、ここでタブレットを使った取材体験ができるゲームを設け、子どもから大人まで楽しめる展示をめざした。徒歩圏に山下公園、中華街と見所の多い場所なので、ぜひ足を運んでいただきたい。

（日本新聞博物館館長 吉澤正一）

日本新聞博物館 開館時間：午前10時から午後5時（入館は午後4時半まで）／休館日：毎週月曜日（月曜が祝日・振替休日の場合は次の平日）／入館料：一般400円ほか／電話：045-661-2040／最寄り駅：みなとみらい線「日本大通り駅」3番 情文センター口から直結

情報発信

■五十嵐一氏の会

サルマン・ラシュディの『悪魔の詩』日本語版の翻訳者、五十嵐一筑波大助教授（当時）の殺害事件を風化させないために、毎年7月に開催している。（7.4 10階ホール）

■国基研日本研究賞 授賞式 主催：（公財）国家基本問題研究所

日本研究の奨励を目的として創設された。第3回受賞者は次のとおり。▶日本研究賞：楊海英（静岡大教授）▶日本研究奨励賞：陳柔縉（コラムニスト・元聯合報政治部記者）、ロバート・D・エルドリッジ（元在沖縄米軍海兵隊政務外交部次長）（7.5 10階ホール）

■シンポジウム「鶴見俊輔と後藤新平」 主催：後藤新平の会

昨年7月20日に死去した鶴見俊輔氏の一周忌を前に開催された。鶴見俊輔、後藤新平2人の仕事や思想を比較対照させながら、日本の今後を考察した。パネリストは赤坂憲雄・学習院大教授、加藤典洋・文芸評論家、加藤陽子・東大大学院教授、鎌田慧・ルポライター、コーディネーターは橋本五郎・読売新聞特別編集委員が務めた。（7.9 10階ホール）

新しいOB会員

■ **いりき 入来院 重建** 1971年共同通信入社。論説副委員長、編集委員室長などを経て2008年退社。現在、同社客員論説委員。



70年間持ちこたえてきた日本社会のシステムが問われている昨今です。わがマスコミも、戦後の出発点での重い反省を繰り返さないようにしたいものです。

■ **くにや 裕子** NHK英語放送アナウンサー、アメリカ総局リサーチャーなどを経て、1993年から2016年3月まで「クロースアップ現代」キャスター。2011年度日本記者クラブ賞受賞。



30年近く続けた生放送を終え、これからはさまざまな地域に行き、直接当事者の言葉に耳をかたむけていけることを楽しみにしています。

■ **きこた 迫田 朋子** 1980年NHK入局。アナウンサー、解説委員、文化福祉番組部エグゼクティブ・ディレクターなどを経て2016年6月退職。



リポーター、キャスター、解説委員、ディレクターと放送に関わるさまざまな仕事をした36年余でした。今後はさらに活動の場を広げます。

■ **たかや 高谷 秀男** 1988年朝日新聞入社。東京本社経済部、西部本社報道センター次長、大分・前橋総局長、特別報道部などを経て2015年12月退社。



目下の関心領域は①選挙制度②消費税・財政③保険④フランチャイズ商法です。お知恵拝借を含め、どうぞよろしくお願ひいたします。

■ **はたの 秦野るり子** 1982年読売新聞入社。ジャカルタ、ローマ両支局、調査研究本部主任研究員などを経て2016年3月退社。現在、富山国際大学教授。



ジャーナリストであり続けたい身にとって、社会の最前線とつながり得る日本記者クラブはありがたい存在です。地方から通わせていただきます。

■ **ふじの 藤延 直道** 1972年テレビ東京入社。報道局長、取締役制作局長、専務取締役などを経て2016年6月退社。



報道の現場からは10数年離れていましたが、長年携わった報道が自分の古里と感じ入会しました。英国のEU離脱など驚くことばかりの世界をなるべく正確に孫に伝えるため、もう少し勉強しようと思います。

■ **みやぎ 宮崎 知己** 1990年朝日新聞入社。経済部、特別報道部デスク、デジタル編集部などを経て2016年3月退社。現在、FACTA編集長代理。



どこまでも深く、粘り強くがモットーです。できるだけ多くの記者会見に参加し、さまざまなことを吸収し、発信したいと思います。

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 葉月懷石(9/2まで)

先付:穴子小袖巻、うなぎ八幡巻 お椀:鰻葛打ちほか 造り:三点盛り 焼物:伊佐木照り焼き 煮物(冷やし):冬瓜鶏そぼろあんかけ 強肴:牛ヒレステーキ 食事:稲庭うどん 水菓子:季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円)(板長:大井由光)

洋食 ミックスミートグリルコース(8/31まで)

マグロとアボカドのサラダ、冬瓜と蟹のコンソメ、ミックスミートグリル(ビーフ、ポーク、ソーセージ)夏野菜添え、完熟トマトシャーベット、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ:黒須修一)

10階アラスカ 夜の半額サービス8/31まで

8月はレストランアラスカのディナータイムがお得です。一般メニューの全てが半額でご利用いただけます。ぜひこの機会にご家族や友人との会食にいかがでしょうか。ご予約(03-3503-2766)をお願いします。

会報連載「新・列島報告」スタート

今号15ページの鹿児島県知事選りポートのタイトルにお気づきでしょうか。8月号から連載「新・列島報告」が始まりました。

2015年4月の会報委員会は、同年3月号まで掲載していた「地方発」を翌月号から「ワーキングプレス」に統一し、毎月1本以上は地方の話題を取り上げることを決めました。しかし、その後は国内外の大事件や大ニュースをテーマに取り上げることができず、地方にスポットを当てることができませんでした。連載の復活を要望する声も寄せられていました。

これを受け7月の会報委員会は今号から、地方会員社に登場していただくページの復活を決めました。タイトルは1997～2000年に連載企画として使用していた「列島報告」に装いあらたな「新」をつけ、「新・列島報告」としました。ご愛読ください。

 **HP更新情報** <http://www.jnpc.or.jp/>

会見詳録 会見の全文文字記録版

- 東京都知事選立候補予定者共同会見(2016.7.13)
- 「原爆で犠牲となった米兵捕虜」森重昭さん、伊吹由歌子さん(2016.6.24)
- 第24回参院選9党党首討論会(2016.6.21)

クラブの電話 ダイヤルイン

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| ●和食レストラン(9階)..... ☎3503-2723 | ●会員事務..... ☎3503-2727 |
| ●洋食レストラン(10階)..... ☎3503-2766 | ●経 理..... ☎3503-2728 |
| ●貸室予約、宴会打ち合わせ..... ☎3503-2724 | ●クラブ行事への申し込み..... ☎3503-2722 |
| ●受 付..... ☎3503-2721 | ●会見申し込みアドレス... kaiken@jnpc.or.jp |

会員現況

- | | | |
|---------------------|-------------|---------------|
| ●法人会員:134社 | ●基本会員:746人 | ●個人会員:1,310人 |
| ●法人・個人賛助会員:64社・141人 | ●特別賛助会員:99人 | |
| ●名誉・功労会員:12人 | ●学生会員:131人 | 計:198社・2,439人 |

記者研修会へお申し込みを

8月25、26両日に開催する第19回記者研修会への参加者を受け付けています。すでに各社の編集・報道責任者あてにお送りしている申込用紙に必要事項を記入のうえ、ファクス(03-3503-7271)またはメール(jimukyoku@jnpc.or.jp)でお申し込みください。締め切りは22日(月)です。

8/25(木) 昼食会:大野恒太郎・検事総長▶会見:山内道雄・島根県隠岐郡海士町長▶パネルディスカッション「原発報道:再稼働、廃炉、核のゴミ処理問題を考える」▶「被災地における地域紙の役割」菊池由貴子・岩手県大槌町・大槌新聞代表▶交流会

8/26(金) 韓国大使館訪問▶昼食会:中村哲・ペシワール会現地代表▶会見:小泉進次郎・衆院議員▶研究会「パナマ文書」奥山俊宏・朝日新聞編集委員、澤康臣・共同通信特別報道室次長

秋のゴルフ会 開催のお知らせ

第105回ゴルフ会を下記の要領で開催します。参加ご希望の方は事務局の河野(03-3503-2764)へご連絡ください。初参加の方も大歓迎です。

日 時:10月5日(水)午前8時30分集合
コ ー ス:八千代ゴルフクラブ(千葉県八千代市)
プレー代:18,333円 会費:3,000円

<理事交代>

西日本新聞社

行武亨執行役員東京支社長(旧・藤井通彦氏)

山陽新聞社

仮谷寛志執行役員東京支社長(旧・岡崎伸二氏)

<法人会員代表変更>

日本海事新聞社

島雅仁代表取締役社長(旧・大山高明氏)

京都新聞社

永島宣彦代表取締役社長(旧・黒田清喜氏)

テレビ朝日

角南源五代表取締役社長(旧・吉田慎一氏)

J-WAVE

中岡壮生代表取締役社長(旧・小笠原徹氏)

読売テレビ放送

伝川幹代表取締役社長(旧・望月規夫氏)

札幌テレビ放送

根岸豊明代表取締役社長(旧・島田洋一氏)

テレビ西日本

坂田正彦代表取締役社長(旧・高木敏弘氏)

NHKエンタープライズ

板野裕爾代表取締役社長(旧・今井環氏)

<訃報>島脩会員(読売新聞出身、83歳)が7月21日死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

会報委員会

委員長=飯塚 浩彦

委 員=稲沢 裕子 井上 洋一 大辻 一晃
大寺 廣幸 鈴木 仁 長崎 和夫
藤井 良広 藤澤 秀敏 吉澤 正一
渡辺 大祐

(事務局:長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：小出 洋平（毎日新聞社写真映像報道センター）



レストラン襲撃人質テロ事件（7.1）で亡くなった犠牲者を悼み花を手向ける女性
＝7月5日 パングラデシュ・ダッカ

善良なムスリムこそ声を

まどろみの中で、明け方の礼拝を告げるアザーンが聞こえる。そんな風情が気に入る、イスラム圏に旅するのが楽しみだったが、昨年初めのエジプト旅行を最後に、二の足を踏んでいる。

国内で交通事故に遭う確率の方が高いだろう、とは思うのだが。エジプトでは、観光バスごとにピストルを携行した私服が護衛についた。カイロ大学日本語学科卒のガイド氏は、仕事が減って副業に始めたクレープ店も苦戦中、と嘆いていた。

善良なムスリムこそ一番の被害者だ。中東や北アフリカから、難民がヨーロッパに押し寄せる。一方でイスラム過激派のテロが拡散する。難民や移民を拒む欧州のポピュリスト政党が勢いづき、イスラム教徒の入国規制を唱えた人物が、米大統領選の候補の1人だ。「文明の衝突」も絵空事ではない。

千年前、欧州最大の都市はイスラム王朝下のコルドバで、千のモスク、六百の公衆浴場、大図書館を備え、ギリシャ古典の研究も盛んだった。ルネサンスの種子は中世イスラム圏で育まれたともいう。

どこで逆転したのか。キリスト教圏でも、カトリックとプロテスタントが殺し合った過去がある。宗派対立が絡み、主戦場ドイツの人口を激減させた「30年戦争」に幕を引いたのは、ウエストファリアの和平会議。17世紀の半ばだった。

ダッカ事件でも、スンニ派の最高権威機関が非難声明を出したが、まだるっこい。聖俗の代表が一堂に会するイスラム版「ウエストファリア」を実現できないか。善良なムスリムこそ声をあげてほしい。

（土谷 英夫）